

敵が包囲する中を後退作戦に移って、最後尾になった時、同郷で最年少の落合一次君が大腿部貫通銃創を受けた時は、敵が追いかけてくる中を肩に担いで夢中で逃げ切り、野戦病院に収容したが間もなく死んだそうで可哀想だった。

四月五日作戦開始から約二ヵ月にわたる長い悪戦苦闘が終わり、六月初旬ようやく前進基地永豊に帰りついた。戦塵を洗う暇も無く北支済南を目指してふたたび行動を開始した。

途中、終戦の日、共産八路军の夜襲を受け「日本へ帰っても駄目だ。こちらに來い命は保障する」と勧められた。二十一年四月佐世保に帰った。

私の想い出

青森県 畑 中 由 松

昭和十七年四月一日、教育召集により、歩兵第五十二部隊補充隊速射砲中隊に入隊。

同年七月十日、下士官候補者を命ぜられ、十二月二十四日下士官候補者集合教育のため盛岡北部六十二連隊において八ヵ月の教育を受けた。なお北海道千歳郡恵庭の新設された教育隊に派遣されました。当時アツツ島において、山崎部隊の玉碎により、札幌市で慰霊祭が行われ、その儀仗兵として参加した想い出がある。

十一月三十日、教育終了式での北部軍司令官の訓辞で「君達は北部軍初級幹部として立派に任務を完うすることを望む」と話され、少しばかりの酒が配られ、各連隊から派遣された戦友と別れ、原隊復帰となった。復帰間もなく甲種幹部教育の名のもとに大湊海軍、工兵隊、それに我が第三百三十一連隊の合同上陸演習が津軽半島逢田海岸で実施され、これに参加しました。その時、波は高く、海は荒れていた。我々の上陸用舟艇は木の葉のように揺れ、工兵隊の号令で着岸とともに一斉に岸辺へ飛ぶのである。意地の悪い工兵になると十数メートル沖合で舟艇のエンジンを止め、ある将校は胸までつかり高波にさらわれそうになる等、とくに将校の乗った舟艇はそのようであったと思う。

帰隊してまもなく一週間の休暇が許可された。

昭和十九年二月一日陸軍伍長を命ぜられ、歩兵砲中隊馬事係下士官を命ぜられる。

六月二十九日動員下令、七月十日歩兵第三百三十一連隊歩兵砲中隊は七月十五日動員完結。いついかなる時でも出動できるよう完備、毎日の演習に励んでいた。

十一月十一日、行く先も知らぬまま、各中隊は特設輸送列車で湊駅を出発しました。私は馬事班長として馬糧車に毛布を敷いての生活なので客車乗員よりは楽であった。

十一月十八日下関着、二十日門司港出航した。

十一月二十一日釜山上陸、ようやく大陸へ来たような感じでした。私は馬と共に貨車で長い旅となった。朝鮮半島を北上するとともに寒さが厳しく、とくに満州安東のあたりがこたえた。

いよいよ中国大陸だ。各梯団は行く先々で軍需物資を受領し、戦備を整え、山海関を南下した。途中度々空襲にあいながらの輸送であった。

— 漢口の爆撃 —

昭和十九年十二月十七日、漢口駅着。駅裏広場へ資材を集積。宿営は郊外の万国競馬場である。廢墟と化した松林に各隊ごとに分散しての野宿であった。とても寒くて寝付かれないまま朝を迎えた。今日は今までにない快晴であった。我が部隊は長江を越えて武昌へと出動命令が出た。早速、各隊は昨日の荷物に黄色い布を目印に結び付け出発を待っていた。

その時、駅の方より「梯団の指揮官はおらぬか」と聞いている。ふと見ると駅司令らしい少佐が立っている。「ただ今、空襲警報が入った。早く散開しろ」と大声で叫んでいる。

我々にはピンと来ない。こんな晴天なのにと空を見上げたが何んの変化もない。聞くところによるとB29十機編隊で飛んだとのことだ。数分後、なるほど西上空より四発のB29の姿が見える。友軍の高射砲陣地から敵機へ砲撃してるのが見える。高度が高いので砲弾は途中で炸裂するのみで一向に命中しない。

だんだん我々の方へ近づいてきた。何かバラバラと

落下物体に気が付く。中隊長以下蝟壺へ退避した。その時、豪雨のような大音と共に焼夷弾が爆発した。漢口駅の広場は黄燐の悪臭と猛火で手の出しようもない。部隊所有の荷物もほとんど焼けた。弾薬箱も焼けたのが時々大きな炸裂音がする。

そのうち二度目の爆撃だ。今度は二百キロ爆弾の投下のようなだ。私も恐る恐る周囲を見る。

その時、近くに六、七メートルぐらいの大きなボイラーがあった。その空洞へ速射砲弾二箱と照準具の箱をいれ私も入っていたが、爆風で気を失った。その時誰かに声をかけられ気付いた。ふっと背に熱気を感じた。上衣を脱ぎ捨てあたりを見ると、右後方で軍刀を振り、部下に対し何かと叫ぶようだ。工兵隊の中隊長が二度目の爆弾で胴体が二つに吹き飛ばされていた。これは大変だ。我中隊長は、と思ひ蝟壺へ駆けよって見ると、白沢准尉と二人で立って私を見て「ヤラレタ」という。軍刀を左手で差しだして見せる。

「中隊長殿、それより隊長殿の顔に血が流れている大丈夫ですか」と申した。隊長殿は「大丈夫だ。軍刀

が軍刀が」という。軍刀を良く見ると「く」の字に曲がっている。隊長の顔の血止めをと思ひ、私の首に巻いていた汚れたタオルで顔を包み、血止めの処置をした。

ちょうど二人の入った蝟壺の左に直撃弾を受けたが運が良く、奇跡的に白沢准尉は無傷であった。ほかに数名の戦死と負傷者があったことを知る。

駅から数キロのところにある陸軍病院へ負傷者および戦死者を運び、その夜は屍衛兵司令として一夜を過ごした。

我が部隊の資材の貨物列車は駅の引込線に停つていて、無数の貫通した穴が無残な傷痕となつていた。この日も晴天に恵まれ、いやな漢口を後に、次の目的地の武昌へ向け出発した。

十二月二十六日、武昌郊外の宝通禅寺で一週間ぐらい休養と作戦準備に明け暮れた。武昌から岳洲までは鉄道輸送で、岳洲から先は徒歩行軍となる。

―大荆街事件―

武昌出発と同時に米軍機の空襲で昼の行軍が出来

ず、夜間行軍となった。岳洲からの道路は山岳の峯のみの行進となりました。

明けて二月二日午前一時頃、山頂を行軍中、先兵隊と連絡がつかず、一時休止の伝達があり、われわれも路上で休止した。その瞬間、中隊本部の方向で爆発音と共にものすごい閃光が夜空に高々と見えた。「伊藤小隊長、畑中軍曹前へ」の通伝があり、現場へ行って見ると中隊本部指揮班の荷駄馬三頭、下士官兵八名の爆死、ほかに数人の重傷者と馬数頭も重傷していた。首の無い者、両脚がもぎ払われ、あるいは腕の付け根から無い者、腰をおろしたままの恰好で虚ろな目を闇に向けたまま死んでいる者もいた。この爆発事件は米軍機の投下した二十三ポンドの落下傘爆弾でした。

直ちに重傷者を収容し、戦死者の片腕を軍医執刀で処置し、重傷馬は馬事係の私が処置した。戦死者の遺体は茶毘にして遺骨は各戦友携行することにした。現場には真新しい墓標を建てて供養し大荆街を後にした。

長沙―湘潭―湘郷をつぎつぎと進撃、毎日の雨で人

馬共大変で、湘潭市の東を流れる河川は、増水して流れるも早かった。河幅は七十メートルぐらいだ。しかし今夜中にどうしても渡河しなければならぬ。しかし水量が多く流れも急で、どうにもならず、馬が倒れ、それに引きずられて水没する者もあつた。真つ暗でどうすることも出来ない。

翌朝、死者数人また馬も十数頭死亡、使用不能などが出た。その後、軍公路へ出たが、いたる所が破壊され通行不能の状況となり、路肩を一系列縦隊の長い分解搬送となった。時々敵機の空爆に合い、予定日数はおくれ、永豊市に着いたのは二月三日でした。この地区で後統部隊の集結を待つことになり、我が中隊は花猫に駐留することになった。

永豊市の警備を命ぜられ、各隊から選ばれた古参の上等兵、兵長十二名と共に市の中央部にある復興部の整備と情報収集任務についた。毎日市内を朝夕二回巡察する。敵機（米軍）の襲撃は定期的となり、二百五十キロ爆弾あるいは時限爆弾の投下が続く。

花猫では後方よりすべての補給がなく、時々近辺の

討伐ということで食糧の徴発に参加した。食糧（飯米）

は何とか手に入るが、副食とくに塩等は容易に入らない。ある時は一人一食あたり赤い「ナンパン」トウガラシ一本という状況が一週間も続いたこともあった。

ある討伐の時、第二大隊に配属され、馬山から北西十キロのところに走馬街という部落を曉に急襲した。

わが中隊から四十一式山砲、二大隊本部より四十一式山砲小隊。わが小隊は左方面から攻撃態勢をとる。この部落は無煙炭の産地で、かなり裕福な部落で建物も立派であった。川幅五十メートルぐらいの急流に橋は一本しかない。橋を渡ろうとすると敵のチエッコ機関銃が集中射撃を浴びてきた。引き上げにかかった時、敵は三方から銃撃してくる。我々も三隊に分けて応戦しながら帰隊した。この討伐でわが小隊二分隊の小川一等兵が行方不明となった。

また、米軍機も次第に空爆の回数を増してくる。われわれは裏山の松林に速射砲陣地を造り応戦し一機を破損させた。

毎日永豊市内巡察に当る。米軍機の時限爆弾が民家

の屋根をつらぬき、寝室に落下しているのを発見した。主人に注意したが聞こうとしない。この先の方にも数発投下されているので、畑の中を横切って軍公路へ出た。その瞬間前方五百メートルの高台の茶畑より、敵の機銃の襲撃を受けた。われわれも猛反撃を加えた。敵はわれわれの反撃にひるみ敗退して行った。

現場へ行つて見ると、敵は六名の死傷者を出した。チエッコ機銃二丁を押し収め、花猫宅にいた大隊長に状況報告を申し上げた。大隊長からねぎらいの言葉があり、あまり遠くへ行かぬよう注意があった。

六月二十日花猫宅を出発、夜行軍である。毎日の雨で兵の被服は、シラミの巢で、実に閉口した。七月二十日ごろ身体に異状があり長沙の病院にて検診の結果マラリヤと判明、薬をもらい退院者を引率して中隊へ帰る。

終戦は岳州において知った。武昌にて本隊と合流、部隊装備と化学兵器を返納した。しかし、我が中隊の速射砲一門と曲射砲一門そして各個人は小銃、帯剣はそのままとなった。それは共産軍との戦いのためであ

つた。

武昌出發は八月二十一日、漢口からは毎日徒步行軍となる。八月二十三日と思う。第三百三十一連隊の軍旗の奉焼が行われた。九月十日ごろ鉄道輸送にて徐州へ。貨物車の中で約二ヵ月ぐらゐも起居する。中国軍も在留日本人と共に二万人くらいが北上出来ず、この地に止まっている。

漢口出發時から共産軍、新四軍が躍動し始め、われわれの北上に対し相当の被害を受けていた。徐州から濟南へはますます警備を嚴重にして藤県で列車は終わつた。行軍となると、共産軍による鉄道破壊が多く、毎日小戦闘が展開し、少なからぬ犠牲者も出た。泰山駅では各分隊ごとに貨車に天幕を下げて休んだ。

早朝、日本人の話し声があるので外へ出て見たら在留邦人であつた。邦人の列車は南下したが、ここから運行しないとのこと。六十歳以上の老人と六歳以下の幼児、病人および妊婦のみが無蓋車と決められたといつていた。男は皆共産軍に連行されたといつていた。

他の女性は全員歩くのだという。荷物は一人六十キロ

と制限されたそうです。

その時、三十歳ぐらゐの女性が私に、この貨車の荷物はこちらに置いて行かなければなりません。兵隊さん方が適当に処分して下さいという。早速、貨車の中を検査したところ、六輛編成の内三輛までが邦人の衣類、寝具、手回り品なのだ。一輛は病院車で医療品等一杯である。他の二輛は食糧であつた。

その時、中国軍の將校二名が貨車を調べている。われわれも手早く武装して、彼等に対しこの荷物は我々が邦人より頂いた物だ、勝手に手を付けてはならぬと申したら、彼等は是非売ってくれとのこと、我々もこれほどの荷物はどうすることもできないので相談の上、チヨビ金（中国金）で四億円で処理し、その金でわれわれ四十八人の隊員の食品代として約三ヵ月ぐらゐ食いつなぐことができた。

十二月二十日、無蓋貨車で濟南以北の禹城へ直行した。ここで小学校北部の煙草会社の建物を利用した。小学校には六百人ぐらゐの中国兵が滞在した。到着した日から食糧の提供があり大変助かった。それは訳あ

りであった。時折共産軍が攻撃を加えてくるので、日本軍で撃退してくれとのことであった。

禹城で数日間共産軍への防備のため陣地構築です。

また、復員業務のため各隊から将校一名と人事係が大隊本部へ集められた。わが速射砲隊からは、伊藤小隊長と白沢人事係が出張した。共産軍の攻撃が始まったのが二十八日で夕食前であった。夜間を利用して右塙に爆薬を仕掛け、大きな穴を開け雪崩込み、連隊砲小隊の宿舎に窓から手榴弾を叩き込まれて多数の死傷者を出した。

共産兵が入るなり、「武器を渡せ、戦闘するのが目的ではない、殺しません」という。良く見ると日本人のようであった。

我々は速射砲を前面の土塙へ向け、手榴弾二発、徹甲弾三発を零距离で発射したが効果はない。共産軍へ兵器を引き渡す際、隙を見て速射砲の生命である照準具を便所の壺へ放り込んだ。それから毎日嚴重な監視下で拉致され、敵陣へ入った日から朝夕共産党の教育を受ける。いよいよ済南へ着いたが何が手取ったの

かなかなか城内に入れない。三時間ほど待つてやっと入ることができた。中は立派な兵舎で内地を思い出す。食事も悪くない、また加給品も出た。

二月二十八日、第一梯団として連隊本部を先頭に第三大隊歩兵砲中隊と四列縦隊となり営門を出る。駅のホームで無蓋貨車の糧秣の上に乗車、青島まで「四百キロ」という。その日はわずか六十キロで野営である。この時気付いたのだが邦人が二、三百人ぐらいが同道していた。翌日は三十キロぐらい走り張店で停止した。鉄道が破壊されてここから行軍となった。

―行軍中掠奪―

共産軍始め中国兵や土民はいたるところで、われわれの隊列に入り、襲いかかってくる。時計、万年筆、リックサック、帽子、眼鏡などは一番先に掠奪される。手出しは一切できない。この日はわれわれ砲兵砲中隊が先頭であった。連隊長も私の隊列の一番真中にいたが、すばやく時計、万年筆を取外し巻脚絆の中に入れて持ち帰ったという。

土民達も棒などを持って押しかけてきて、われわれ

の荷物を手当り次第に掠奪してしまふ。しかし一切手出しができなかったことが一番くやしかった。三月四日坊子に辿り着き、そこから列車輸送となり、七日未明、海が見えたので皆大喜びでした。青島の街に近く、海岸辺のコークス工場跡の古い釜穴に四、五人ずつ入つての生活が始まつた。私はドラム缶二個拝借して風呂を造り皆に喜ばれた。

釜戸の裏側でこそこそと音がするので行つて見ると、中国軍人の一人が何部隊かと尋ねるので弾部隊だというと「ご苦労だったなあ」という。私も貴方たちはと聞くと二・二六事件の残兵という。郷里はと聞くと一切何もうなといわれたので私も聞かなかつたが、相当年配の軍曹で、抑留部隊の炊き出し班長だといつていた。今「しるこ」をやるから入れ物を持ってこいとのこと、飯盒に三つ分貰つてきた。二・二六事件の将校は処刑されたが、兵は支那へ送られていたことを初めて知つた。

ここの食事は実に悪かつた。そこで市内の清掃の使役に出て、日当（チョビ金で）二百円貰つて饅頭五個

を買い求め命を繋いだ。

二十一年三月二十九日、乗船出航、四月一日佐世保港上陸、三日目になつて懐かしの青森へ帰ることができた。